

# 高校生の対人関係に自己評価が及ぼす影響に関する実証的研究

## 問題と目的

周知のように、1996年に出された中央教育審議会答申によれば、「生きる力」の育成がこれからの学校教育に緊要な課題とされている。中等教育の段階で必用とされる「生きる力」とは、具体的には自己指導能力とコミュニケーション能力であると考えられる。自己指導能力とは、人生の選択に際し、自ら考え判断し行動する力、たとえその選択が失敗に終わったとしてももう一度人生の選択に立ち向かう意志の力のことである。また、コミュニケーション能力とは、意思を疎通させる能力のみならず、他者に対する思いやり、共感性、そして信頼感をも含むものであると定義する。

さて、今日の「高校生の現実」を巡る問題は多岐に渡っている。2%を超える中途退学者問題、いじめや登校拒否、突発的・衝動的な感情爆発、規範感覚の変容、自己中心的で公共意識のない言動、授業に対する無関心（「学び」からの逃避）、そして他者関係の回避などが挙げられる。

これらの諸問題から共通するキーワードとして、「基本的信頼感」、「関係回避」、「自己中心」という言葉が挙げられる。他者に「基本的信頼感」を持たず、他者との関係を回避し、「自己中心的」な思考・判断をする。つまり、自己と他者とのコミュニケーションの問題が、これらの諸問題に共通する要因であると言える。

したがって、本研究においては、高校生のコミュニケーション能力に焦点を当て考察を進めていきたいと考える。研究を遂行する上で、「他者を思いやる気持は、自己に価値を見いだす自尊感情に根ざしている」という仮説を立てた。そして、研究の目的としては、高校生の自己評価が他者とのコミュニケーション意識の在り方に密接な関係があることを実証的に明確にすることである。

今後の展望としては、自己評価の高まりが、他者理解や他者との共感性、他者に対する基本的信頼感を深化すものであることを考察し、高校生の自己評価を高める学校教育（教育課程の編成、指導）の在り方について言及したいと考える。

本研究は、「土佐の教育改革を考える会」で提示された「教員の資質・指導力の向上」のための重要な基礎的資料となるのみならず、広く教育の問題にも提供できる性格を有するものであると考えられる。

## 他者関係意識と自己評価

### 第1節 調査方法と調査時期

#### 第1項 調査項目

調査項目は、ローゼンバーグの自尊感情尺度を参考にして、コミュニケーションツール、家族に対する意識、所属するクラスに対する意識、教師に対する意識、友人に対する意識、自己肯定観と自己否定観に基づいた自己評価の質問領域を設け、合計50項目の質問紙を作成した。

#### 第2項 調査方法、調査対象と調査時期

高知県下において、学校規模、地域性、学科編成、そして上級学校等への進学率を考慮して選んだ高等学校18校（普通科を主とする高等学校8校、専門科を主とする高等学校3校、総合制高等学校7校）の生徒を対象とした。

質問紙は直接持参し、学校長承認の上、公民科担当教師に配布と回収を依頼した。調査対象となった学校数、生徒数並びに調査票回収数（率）を表3-1-1に示している。なお、学科別生徒数は表3-1-2に示している。

調査の時期は、1998年10月1日から12月20日までであった。

表3-1-1; 調査票回収率

学 校 数	18 校
配 布 数	2500 人
回 収 数	2077 人(83.1 %)

表3-1-2; 学科別生徒数 人(%)

普 通 科	1196 人(57.6 %)
専 門 科	881 人(42.4 %)

## 第2節 調査対象の特色

### 第1項 調査対象県の特色

#### 1. 中学校卒業者の進学率の推移

高知県の中学校卒業者の高等学校への進学率の推移は、表3-2-1に示すとおりである。これによれば、過去10年間全国平均を下回っているが、近年進学率の上昇が目立ち、全国平均に近づいている。

表3-2-1; 高知県の中学校卒業者の高等学校進学率の推移 (%)

年度	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
全国	94.7	95.1	95.4	95.9	96.2	96.5	96.7	96.8	96.8	96.8
高知	92.2	92.9	93.1	93.3	92.6	94.2	94.5	95.6	94.7	95.4

(1998年文部省『学校基本調査』に基づいて作成)

#### 2. 高等学校卒業生の進路状況

##### (1) 大学等への進学状況

表3-2-2に示すように、全国の大学および短期大学への進学率は1993年を契機として上昇傾向にある。高知県では、1993年に30%を超え、1997年を境にして全国平均に近づいている。表3-2-3は、専修・各種学校等への進学率を表している。高知県では、大学等への進学者と専修学校への進学者の比率がほぼ同程度で推移してきたが、1997年度は前年比9.1ポイント減少している。

表3-2-2; 高知県の高等学校卒業者の大学および短期大学への進学率の推移 (%)

年度	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
全国	30.7	30.6	31.7	32.7	34.5	36.1	37.6	39.0	40.7	42.5
高知	29.2	27.7	28.5	28.7	30.2	30.0	30.8	32.7	36.4	37.3

(1998年文部省『学校基本調査』に基づいて作成)

表3-2-3; 高知県の高等学校卒業者の専修学校への進学率の推移 (%)

年度	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
全国								16.8	16.4	
高知	23.5	24.9	25.2	27.6	26.5	30.6	30.3	31.7	22.6	

(1998年文部省『学校基本調査』に基づいて作成)

## (2) 就職状況

高知県内の企業 500 社のうち、資本金 1 億円、従業員数 300 人以上の比較的大規模な企業が 72 社(14.4 %)あり、そのうち 1996 年度に高等学校卒業者の雇用実績があったのは 30 社(6.0 %)であった。<sup>(1)</sup>したがって、大半の高等学校卒業者は、中小企業に就職している。

次いで 1996 年度の高知県内就職者に占める職業別就職者の割合は表 3-2-4 に示すとおりである。

表3-2-4;高知県内就職者に占める職業別就職者数 人(%)

専門的・技術的職業従事者	367 人(21.3 %)
事務従事者	195 人(11.3 %)
販売従事者	295 人(17.2 %)
サービス職業従事者	264 人(15.4 %)
保安職業従事者	24 人(1.4 %)
農林漁業従事者	44 人(2.6 %)
運輸・通信従事者	21 人(1.2 %)
技能工、採掘・製造・建設作業及び労務作業者	475 人(27.6 %)
その他	34 人(2.0 %)
合 計	1719 人(100 %)

## 3. 高等学校の保護者および地域社会の進学に対する意識

1993 年に高知県教育委員会がおこなった一般県民を対象とした「教育世論調査」<sup>(2)</sup>によれば、高等学校の教育に対する関心として、「大学への進学問題」(33.9 % )、「教師の資質の問題」(30.5 % )、「中途退学の問題」(24.8 % )等があげられている。なかでも、「大学への進学問題」は、高等学校の保護者に関心が高く、40.6 %の保護者があげている。

次いで高等学校の教育に対して「満足している」と解答した者は 21.6 %と少なく、55.1 %が「不満である」と解答している。不満足な理由として、「公立と私立の違いが大きい」とする者が 49.9 %と半数近く、次いで「個性を生かす教育が十分行われていない」(36.5 % )、「非行が目立ち、生徒の健全育成が行われていない」(25.2 % )、「道德教育が十分行われていない」(24.9 % )、「中途退学者が多い」(23.7 % )等があげられている。また、高等学校の学習指導に望むこととして、「人格を高める道德教育に力を入れて欲しい」(34.9 % )、「大学進学の希望が叶えられるだけの学力を付けて欲しい」(30.3 % )、「生涯学習の基盤となる基本的な学習事項の指導に重点を置いて欲しい」(26.1 % )が上位にあげられている。

このように、高知県における高校生の保護者および地域社会の高等学校教育に対する意

識としては、高等学校の教育に5割を超える者が不満足感を持っている。不満足の原因には、進学問題や教師の資質、中途退学の問題をあげることができる。そして、高等学校教育改善の方策としては、大学進学に対応できる学力の保障や道德教育の充実を望んでいる。

## 第2項 調査対象者の特色

本調査における回答者の特色は表3-2-5に示すとおりである。

表3-2-5;調査回答者の特色 人(%)

所属学年	1年	776人(37.4%)
	2年	697人(33.6%)
	3年	604人(29.1%)
所属学科	普通科	1196人(57.6%)
	専門科	881人(42.4%)
性別	男性	846人(40.7%)
	女性	1217人(58.6%)
兄弟(姉妹)数	無	128人(6.2%)
	1人	850人(40.9%)
	2人	815人(39.2%)
	3人以上	263人(12.7%)

## 第3節 調査結果

### 第1項 高校生のコミュニケーションツール

高校生が友人とのコミュニケーションに利用する機器を表3-3-1に示している。まず、ポケットベルを持っている者は24.1%であり、「頻繁に活用する」者は16.4%となっている。次いで、家庭用電話を「頻繁に活用する」者は39.7%、手紙を「頻繁に活用する」者は29.9%、パソコン通信を「頻繁に活用する」者は2.2%となっている。また、都市部の高校生の約8割が所有する<sup>(3)</sup>と言われているPHSや携帯電話を持っている者は19.2%であり、それを「頻繁に活用する」者は10.5%となっている。PHSや携帯電話の所有率や活用率を性差で見ると、表3-3-2に示すように女子の方が男子よりも高い。

表3-3-1; 高校生のコミュニケーションツール

	持っていない	あまり使わない	頻繁に活用	na	av	sd	人(%)
ポケットベル	1528(73.6)	160(7.7)	341(16.4)	48(2.3)	1.41	0.76	
携帯電話(PHS)	1657(79.8)	180(8.7)	219(10.5)	21(1.0)	1.29	0.65	
	遣わない	あまり使わない	頻繁に活用	na	av	sd	
家庭用電話	174(8.4)	1043(50.2)	825(39.7)	35(1.7)	2.34	0.60	
パソコン通信	1827(88.0)	189(9.1)	45(2.2)	16(0.8)	1.12	0.37	
手紙	818(39.4)	574(27.6)	621(29.9)	64(3.1)	1.92	0.85	

na:no answer , av:average , sd:standardension

表3-3-2; 性別 \* 携帯電話(PHS)の保持・活用

	持っていない	あまり使わない	頻繁に活用	na	人(%)
男子	710(83.9)	77(9.1)	52(6.1)	7(0.8)	
女子	938(77.1)	140(11.5)	126(10.4)	13(1.1)	

$\chi^2 = 84.44$  df.=6 P<.001 na:no answer

P H S や携帯電話を持つ理由として、「時間や相手の家のことを気にせず深夜でも友だちに連絡をとれる」、「合って話すと相手の顔色を見てしまう。携帯が話しやすい」、「自宅にほとんどいないので、携帯電話がないと友だちと連絡がとれない」<sup>(4)</sup>が挙げられており、高校生にとってはP H S や携帯電話が友人関係を維持する主要な手段となっている。

このように、高校生のコミュニケーションツールとしては、家庭用電話が4割近くと多いが、今後は都市部の高校生のように、P H S や携帯電話が主たるコミュニケーションツールになっていくものと推察される。

## 第2項 高校生のコミュニケーションベースの実態

表 3-3-3 は、高校生が周囲とコミュニケーションをとる上での基盤になる会話や食事についての実態を示したものである。

まず、親との会話の機会が、「頻繁にある」と回答した者は 55.8 %となっており、「全くない」「あまりない」「少しある」と回答した者は 43.7 %となっている。家族との食事は、64.9 %の者が「家族みんなで」とっている一方で、23.7 %の者は「自分一人で」食事をしている。

次いで、クラスの中に話をしたことの無い人を 57.4 %の者が「少しいる」「たくさんいる」と回答している。

表3-3-3; 高校生のコミュニケーションベース

	全くない	あまりない	少しある	頻繁にある	na	av	sd	人(%)
親との会話	62(3.0)	211(10.2)	633(30.5)	1159(55.8)	12(0.6)	3.43	0.7	
教師との会話	204(9.8)	762(36.7)	813(39.1)	293(14.1)	5(0.2)	2.58	0.85	
	自分一人で	父親とのみ	母親とのみ	家族みんなで	na	av	sd	
家庭での食事	492(23.7)	38(1.8)	180(8.7)	1349(64.9)	18(0.9)	3.17	1.27	
	全くいない	あまりいない	少しいる	たくさんいる	na	av	sd	
クラスで話をし ない人	372(17.9)	507(24.4)	904(43.5)	289(13.9)	5(0.2)	2.52	0.93	
クラスで自己開 示できる人	175(8.4)	393(18.9)	1122(54.0)	377(18.2)	10(0.5)	2.83	0.82	

na:no answer , av:average , sd:standardension

表 3-3-4 は、クラスの中に話をしたことがない人の存在を学年別に表している。第2 学年、第3 学年ですら、過半数を超える者がクラスの中に話をしたことがない人が「少しいる」「たくさんいる」と回答している。それに比して、クラスの中に自己開示ができる人の存在を 27.3 %の者が「全くいない」「あまりいない」と回答している。

表3-3-4; 学年 \* クラスで話をしない人

	全くいない	あまりいない	少しいる	たくさんいる	na	人(%)
1 年	95(12.2)	197(25.4)	370(47.7)	113(14.6)	1(0.1)	
2 年	128(18.4)	180(25.8)	293(42.0)	94(13.5)	2(0.3)	
3 年	149(24.7)	130(21.5)	241(39.9)	82(13.6)	1(0.2)	

$\chi^2 = 38.48$  df.=8 P<.001 na:no answer

さらに、教師との会話の機会は、46.5 %の者が「全くない」「あまりない」と回答している。表 3-3-5 は、教師との会話の機会を学年別に示したものである。

表3-3-5; 学年 \* 教師との会話の機会

	全くない	あまりない	少しある	頻繁にある	na	人(%)
1 年	92(11.9)	300(38.7)	306(39.4)	76(9.8)	2(0.3)	
2 年	61(8.8)	249(35.7)	269(38.6)	116(16.6)	2(0.3)	
3 年	51(8.4)	213(35.3)	238(39.4)	101(16.7)	1(0.2)	

$\chi^2 = 23.21$  df.=8 P<.001 na:no answer

第2学年、第3学年ですら教師との会話が「全くない」「あまりない」と回答している者が4割を超えている。

このように、高校生が周囲とのコミュニケーションベースとなる会話については、半数前後の者が親、教師、クラスメイトのいずれともその機会が、「全くない」「あまりない」と回答している。また、「家族が顔をそろえる食卓はしつけの場」、「だんらんの中で人間関係を学ぶ場」<sup>(5)</sup>であるはずの家庭における食事は、4人に1人が孤食となっている。

### 第3項 高校生の他者関係意識

高校生の他者関係意識の項目について、「否定解答」(1点)、「やや否定解答」(2点)、「やや肯定解答」(3点)、「肯定解答」(4点)の4件法で評定を求めた。さらに、調査結果を主因子法・バリマックス回転によって因子分析を行った。固有値1.0以上、因子負荷量0.4以上を条件とし、全分散の50%を説明できることを指標とした。

高校生は、他者との関係をどのように意識しているのだろうか。高校生の他者関係意識に関する質問項目の因子分析の結果、および各項目の解答結果、評定平均を、表3-3-6に示している。高校生の他者関係意識として、4因子が抽出された。

第1因子は、クラスメイトや友人との関係にストレスを感じたり、関係に気を遣うことから、「他者関係疲労」と命名した。所属しているクラスにストレスを感じている者は43.0%であり、クラスには自分の居場所がないと感じている者は26.0%であった。また、クラスには、「関わりたくないなら関わりたくないひと」がいると答えた者は50.3%、「利己的(自分勝手)な振る舞いをするひと」がいると答えた者は57.7%であった。さらに、親しくないクラスメイトには64.6%の者が気を遣っている。

友人に対しては、「かなり気を遣っている」者が44.6%で、友人から「嫌われるのではないかと不安を感じる」者が57.2%、友人関係で「何か満たされないもの」を感じている者が46.9%となっている。

第2因子は、親との信頼関係が構築されているかどうかより、「親との相互理解」と命名した。親から理解されていると感じている者は57.4%であり、理解されていないと感じている者は42.3%であった。その一方で、親のことを理解していると答えた者は62.6%で、理解していないと答えた者は37.1%であった。また、親との信頼関係を築いていると解答した者は64.6%であり、35.0%の者は親との信頼関係が築けていないと感じている。さらに、親からの生活態度や勉強についての指導・小言については、57.3%の者が「腹立たしい」、「うっとうしい」と感じている。そして、23.1%の者が家の中で孤立を感じている。

表3-3-6; 他者関係意識と解答結果

質問項目	1因子	2因子	3因子	4因子	否定解答	肯定解答	na	av	sd
<b>[他者関係疲労]</b>									
クラスにいとストレスを感じるがありますか。	0.726	0.010	-0.182	0.078	1181(56.9)	892(43.0)	4(0.2)	2.34	0.91
クラスには自分の居場所がないと感じることがあります。	0.651	0.117	-0.051	0.136	1528(73.6)	540(26.0)	9(0.4)	1.98	0.85
友達との関係に何か満たされないものを感じますか。	0.614	0.062	0.092	-0.011	1093(52.6)	975(46.9)	9(0.4)	2.44	0.86
私は友達から嫌われるのではないかと不安を感じる。	0.556	0.142	0.332	-0.123	884(42.5)	1189(57.2)	4(0.2)	2.64	0.86
クラスの中には、関わらなくてすむなら関わりたくないひとがありますか。	0.552	-0.046	-0.253	0.012	1024(49.3)	1044(50.3)	9(0.4)	2.41	0.86
クラスの中には、利己的な(自分勝手な)振る舞いをするひとがありますか。	0.508	-0.090	-0.179	-0.052	867(41.8)	1199(57.7)	11(0.5)	2.59	0.77
私は友達や先輩などにかなり気をつけている。	0.475	0.022	0.284	0.054	1145(55.1)	926(44.6)	6(0.3)	2.40	0.86
クラスのあまり親しくないひとに気がつかれますか。	0.424	-0.052	0.250	-0.056	728(35.1)	943(64.6)	6(0.3)	2.75	0.91
<b>[親との相互理解]</b>									
あなたは、親はあなたのことを理解していると思いますか。	-0.053	-0.816	0.124	-0.033	877(42.3)	1192(57.4)	8(0.4)	2.64	0.87
あなたは、親と信頼関係を築いていると思いますか。	-0.003	-0.815	0.146	-0.046	727(35.0)	1342(64.6)	8(0.4)	2.83	0.89
あなたは、親のことを理解していますか。	0.003	-0.763	0.169	-0.032	770(37.1)	1300(62.6)	7(0.3)	2.73	0.82
あなたは、親からの生活態度や勉強についての指導や小言をどのように感じていますか。	0.017	-0.616	0.116	0.150	1190(57.3)	869(41.9)	18(0.9)	2.37	0.70
あなたは、家のなかで孤立を感じることがありますか。	0.255	0.515	0.067	0.040	1586(76.3)	479(23.1)	12(0.6)	1.88	0.87
<b>[教師との相互理解]</b>									
あなたは、先生の生活指導は自分のためになっていると思いますか。	-0.053	-0.185	0.674	0.110	1147(55.2)	921(44.3)	9(0.4)	2.39	0.90
あなたは、授業中における先生の注意をどのように受け止めていますか。	0.061	-0.192	0.659	0.064	718(34.6)	1351(65.1)	8(0.4)	2.73	0.79
あなたは、先生のことを理解していると思いますか。	-0.092	-0.246	0.648	0.063	1640(78.9)	423(20.4)	14(0.7)	1.96	0.75
あなたは、先生にもっと自分のことを理解してもらいたいと思いますか。	0.066	-0.119	0.643	-0.150	1302(62.7)	767(36.9)	8(0.4)	2.29	0.98
あなたは、先生と信頼関係を築いていると思いますか。	-0.191	-0.257	0.599	-0.066	1472(70.9)	591(28.5)	14(0.7)	2.09	0.81
<b>[理想的友人関係]</b>									
友達との関係は、相手の気持ちに深入りしないことが望ましい。	0.045	0.024	0.100	0.647	1136(54.7)	929(44.7)	12(0.6)	2.40	0.92
友達とけんかや口論をすることは大切である。	0.112	-0.063	0.130	-0.602	838(40.4)	1231(59.2)	8(0.4)	2.63	0.89
友達との関係は、自分の気持ちや感情を抑え、相手の話に合わせる大切である。	0.075	-0.013	0.244	0.587	1326(63.8)	748(36.0)	3(0.1)	2.18	0.93
<b>[残余項目]</b>									
一人で過ごす時間より友達と過ごす時間が大切である。	-0.192	0.101	0.303	-0.377	565(27.2)	1504(72.4)	8(0.4)	3.02	0.92
友達との関係では、相手があるがままに認めることが大切である。	0.057	-0.011	0.186	-0.083	1111(53.4)	958(46.1)	8(0.4)	2.470	0.95
固有値(回転前)	3.945	2.829	1.857	1.529					
寄与率(回転後)	0.120	0.239	0.357	0.423					
累積寄与率(回転後)	0.120	0.119	0.118	0.067					
因子負荷量二乗和(回転後)	2.874	2.856	2.828	1.602					

ns:no answer , av:average , sd:standardize

第3因子は、教師との信頼関係が形成されているかどうかより、「教師との相互理解」と命名した。教師に自分のことを理解して欲しいと考えている者は 36.9 %であり、「全く

思わない」、「あまりそう思わない」と解答した者は 62.7 %であった。一方で、教師のことを理解していると答えた者は 20.4 %で、理解していないと答えた者は 78.9 %であった。また、教師と信頼関係を築いていると解答した者は 28.5 %であり、70.9 %の者は信頼関係が築けていないと感じている。さらに、教師の生活指導については、55.2 %の者が自分のためにはなっていないと感じている。そして、授業中における教師からの注意を、34.6 %の者があまり意に介していない。

第 4 因子は、高校生が理想としたり志向する友人関係の在り方より、「理想的友人関係」と命名した。高校生が理想とする友人関係として、相手の気持ちに深入りしないことが望ましいと考えている者は 44.7 %であった。また、喧嘩や口論については、40.4 %の者は大切なものではないと考えている。さらに、自分の気持ちや感情を抑え相手の話に合わせることが大切であるとした者は 36.0 %となっている。

なお、残余項目ではあるが、友人関係では「相手があるがままに認めることが大切である」とする者は 46.1 %で、「一人で過ごす時間より友達と過ごす時間が大切である」とした者は、72.4 %であった。

このように、他者関係疲労に陥っている高校生は少なくない。友人関係で、半数近くの者が気を遣い、関係の維持に不安を持ち、関係そのものに不満足感を持っている。クラスメイトに対しては、積極的な関係を築こうとせず、気を遣いストレスを感じる対象と捉えている。また、高校生のうち三人に一人は、親との相互理解ができていないと感じている。さらに、教師に対しては、大半の高校生が信頼関係が構築されていないと感じており、教師を理解していないし、教師に自分自身を理解して欲しいとも望んでいない。その上、半数前後の高校生は、教師の生活指導や授業時の注意についても、あまり意に介していない。そして、高校生が志向する理想的友人関係は、相互の気持ちに深入りしない平板で希薄な関係を理想としている。

では、このような他者関係意識を持つ高校生は自己をどのように捉えているのであろうか。

#### 第 4 項 高校生の自己評価

高校生の自己評価の項目について、「否定解答」( 1 点 )、「やや否定解答」( 2 点 )、「やや肯定解答」( 3 点 )、「肯定解答」( 4 点 ) の 4 件法で評定を求めた。さらに、調査結果を主因子法・バリマックス回転によって因子分析を行った。固有値 1.0 以上、因子負荷量 0.5 以上を条件とし、全分散の 30 %を説明できることを指標とした。

高校生は、自己をどのように意識しているのであろうか。高校生の自己評価に関する質問項目の因子分析結果、および各項目の解答結果、評定平均を、表 3-3-7 に示している。

高校生の自己評価として、2因子が抽出された。なお、残余項目は、バリマックス回転前の固有値が0.99であり、因子負荷量は0.35以上となっている。

表3-3-7;自己評価と解答結果

質問項目	1因子	2因子	否定解答	肯定解答	na	av	sd
<b>[現実自己像]</b>							
私は自分が駄目な人間だと思う。	0.819	0.103	1160(55.8)	905(43.6)	12(0.6)	2.36	0.97
私は自分が役に立たない人間だと感じることがある。	0.798	0.157	939(45.2)	1130(54.5)	8(0.4)	2.56	0.94
私は失敗者だと感じるがよくある。	0.767	0.081	1110(53.5)	955(46.0)	12(0.6)	2.43	0.96
私は自慢できるものがない。	0.602	-0.130	1206(58.1)	865(41.6)	6(0.3)	2.29	1.02
<b>[理想的自己志向]</b>							
誰かの役に立ちたいと思う。	0.034	0.800	420(20.2)	1649(79.4)	8(0.4)	3.23	0.90
私は誰かに認められたいと思う。	0.114	0.796	629(30.3)	1442(69.4)	6(0.3)	2.96	0.98
私は私の存在価値を何かに見いだしたいと思う。	0.039	0.781	647(31.1)	1424(68.6)	6(0.3)	3.01	1.01
私は自分をもっと尊敬できたらと思う。	0.238	0.599	805(38.8)	1264(60.8)	8(0.4)	2.76	1.02
<b>[残余項目]</b>							
私は自分を好ましい人間だと思う。	-0.263	0.044	1506(72.5)	558(26.8)	13(0.6)	2.11	0.85
私にはたくさんの長所があると思う。	-0.236	0.158	1510(72.7)	564(27.2)	3(0.1)	2.13	0.87
私は自分に満足している。	-0.200	-0.085	1490(71.7)	577(27.8)	10(0.5)	2.03	0.92
私は何をしてもひとと同じくらいうまくできる。	-0.121	0.072	1669(80.3)	393(18.9)	15(0.7)	1.90	0.80
私は他の人と同じくらい価値のある人間だと思う。	-0.205	0.228	1280(61.6)	785(37.8)	12(0.6)	2.39	1.04
固有値(回転前)	3.703	2.633					
寄与率(回転後)	0.196	0.184					
累積寄与率(回転後)	0.196	0.380					
因子負荷量二乗和(回転後)	2.552	2.394					

ns:no answer , av:average , sd:standardize

第1因子は、現実の自己に対するイメージから、「現実自己像」と命名した。全体的に、自己を否定的に捉えている高校生は少なくない。まず、自分を駄目な人間だと思っている者は43.6%で、役に立たない人間だと感じている者は54.5%となっている。また、46.0%の者が自分を失敗者だと認識している。そして、自慢できるものが何もないと思っている者は41.6%となっている。

第2因子は、自己をどのように在らしめたいかということにより、「理想的自己志向」と命名した。まず、誰かの役に立ちたいと考えている者は79.4%となっており、自己の存在を誰かに認めてもらいたいと考えている者は69.4%となっている。また、自己の存在価値を何かに見いだしたいと考えている者も68.8%となっている。さらに、自己をもっと尊敬したいと60.8%の者が考えている。

なお、残余項目ではあるが、高校生の多くは、自己を好ましく思っておらず(72.5%)、自己の長所を見いだしていない(72.7%)。また、自己に不満を持ち(71.7%)、他者と同等の能力が自己にあるとは考えていない(80.3%)。そして、自己の存在価値すら見いだ

せないでいる（61.6％）。

このように、高校生の多くは自己の良さや能力を見いだしていない。とりわけ、二人に一人の割合で現実自己像を否定的に意識している。それは、自閉的で自虐的ですからあるように推察される。しかし、このような現実の自己像を持ちながらも、7割前後の高校生は自己の能力や存在を何かに見いだしたいと考えている。同様に、高位な自尊感情を持ちたいとも望んでいる。したがって、高校生の多くは現実自己像に対するアンビバレントな意識として理想的自己志向を有しているものと推察できる。

では、高校生の自己評価の差異が他者関係の意識に何か影響を及ぼしているのだろうか。つぎに、自己評価のタイプ別による他者関係意識を見ることにする。

### 第5項 自己評価の差異による他者関係意識

表3-3-8は、自己評価の差異による他者関係意識の有意差検定結果を示したものである。現実自己像に関する各質問項目全てにわたり、「そう思う」「ややそう思う」と回答した者、および「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した者を抽出し、それぞれ否定群、肯定群とした。同様に、理想的自己志向に関する各質問項目全てにわたり、「そう思う」「ややそう思う」と回答した者、および「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した者を抽出し、それぞれ弱い群、強い群とした。これらの群について、第3項で得た他者関係意識に関する因子ごとに、それぞれの評定平均値およびt検定結果を示した。なお、現実自己像肯定群は528人（25.4％）、現実自己像否定群は405人（19.5％）であり、理想的自己志向が強い群は853人（41.1％）、理想的自己志向が弱い群は193人（9.3％）であった。

#### 1. 現実自己像の差異による他者関係意識

現実自己像の肯定群と否定群とでは他者関係意識に顕著な差異が生じた。まず、他者関係疲労では8項目中7項目で有意な差が見られた。次いで、親との相互理解では5項目全てに有意な差が見られた。さらに、教師との相互理解では5項目中2項目で、理想的友人関係では3項目中2項目で有意な差が見られた。

具体的には、現実自己像を否定している者は、クラスでストレスを感じ、クラスに自分の居場所がないようにも感じている。また、クラスメイトに対しては積極的な関係を回避し、友人に対しても必要以上に気を遣い、友人との関係に何か満たされないものを感じている。

次いで親との関係意識では、現実自己像を肯定している者ほど、親との信頼関係が築けており、相互理解もなされていることより、親からの小言を疎んじることや家の中で孤立

を感じることがない。

表3-3-8; 自己評価の差異による他者関係意識の有意差検定結果

質問項目	現実自己像			理想的自己志向		
	肯定群	否定群	t検定	弱い群	強い群	t検定
<b>【他者関係疲労】</b>						
クラスにいるとストレスを感じることがありますか。	2.21	< 2.60	**	2.43	> 2.41	
クラスには自分の居場所がないと感じることがありますか。	1.71	< 2.32	**	1.96	< 2.08	
友達との関係に何か満たされないものを感じますか。	2.20	< 2.65	**	2.03	< 2.63	**
私は友達から嫌われるのではないかと不安を感じる。	2.25	< 3.05	**	2.18	< 2.87	**
クラスの中には、関わらなくてすむなら関わりたくないひとがいますか。	2.33	< 2.55	**	2.51	> 2.44	
クラスの中には、利己的な(自分勝手な)振る舞いをするひとがいますか。	2.58	< 2.64		2.56	< 2.62	
私は友達や先輩などにかなり気がつかっている。	2.17	< 2.55	**	1.99	< 2.53	**
クラスのあまり親しくないひとに気がつかれますか。	2.56	< 2.95	**	2.45	< 2.92	**
<b>【親との相互理解】</b>						
あなたは、親はあなたのことを理解していると思いますか。	2.78	> 2.43	**	2.21	< 2.72	**
あなたは、親と信頼関係を築いていると思いますか。	2.96	> 2.64	**	2.40	< 2.91	**
あなたは、親のことを理解していますか。	2.84	> 2.56	**	2.29	< 2.81	**
あなたは、親からの生活態度や勉強についての指導や小言をどのように感じていますか。	2.45	> 2.29	**	2.19	< 2.41	**
あなたは、家のなかで孤立を感じることがありますか。	1.70	< 2.13	**	1.91	< 1.95	
<b>【教師との相互理解】</b>						
あなたは、先生の生活指導は自分のためになっていると思いますか。	2.35	< 2.39		1.97	< 2.53	**
あなたは、授業中における先生の注意をどのように受け止めていますか。	2.68	< 2.75		2.28	< 2.87	**
あなたは、先生のことを理解していると思いますか。	2.02	> 1.84	**	1.61	< 2.03	**
あなたは、先生にもっと自分のことを理解してもらいたいと思いますか。	2.27	> 2.22		1.59	< 2.59	**
あなたは、先生と信頼関係を築いていると思いますか。	2.23	> 1.93	**	1.65	< 2.15	**
<b>【理想的友人関係】</b>						
友達との関係は、相手の気持ちに深入りしないことが望ましい。	2.27	< 2.51	**	2.51	> 2.32	**
友達とけんかや口論をすることは大切である。	2.64	< 2.69		2.23	< 2.82	**
友達との関係は、自分の気持ちや感情を抑え、相手の話に合わせる事が大切である。	2.11	< 2.30	**	2.32	> 2.15	*
<b>【残余項目】</b>						
一人で過ごす時間より友達と過ごす時間が大切である。	3.00	< 3.03		2.63	< 3.13	**
友達との関係では、相手があるがままに認めることが大切である。	2.38	< 2.55	**	2.24	< 2.54	**

\*\* : P < .01 \* : P < .05

さらに、教師との関係意識では、現実自己像の肯定群と否定群とで有意差が生じたのは「先生のことを理解しているか」と「先生と信頼関係を築いているか」の2項目のみであった。

いずれの項目も評定平均値が 2.5 を下回っており、現実自己像を肯定している者は否定している者よりも教師を理解し信頼関係を築いていると考えている傾向にあるが、全体的には教師との相互理解はなされていない。

そして、理想的友人関係では、現実自己像を否定している者ほど、相手の気持ちに深入りしないで、自分の気持ちや感情を抑えることが大切であると考えている。

このように、現実自己像の認識によって他者関係意識の在り方が異なっている。すなわち、現実自己像を否定している者ほど、他者関係に疲れ、希薄で平板な関係を友人関係の理想としている。その一方で、現実自己像を肯定している者は、他者関係に疲労することもなく、親との相互理解も十分はかられており、深く、時には対立も辞さない友人関係を理想としている。

## 2. 理想的自己志向の差異による他者関係意識

理想的自己志向の強い群と弱い群とでは次のような差異が生じた。まず、他者関係疲労では 8 項目中 4 項目で有意な差が見られた。つぎに、親との相互理解では 5 項目中 4 項目で有意な差が見られた。さらに、教師との相互理解では 5 項目全てに、理想的友人関係では 3 項目全てに有意な差が見られた。

具体的には、他者との関係において、理想的自己志向の強い群ほど他者に対し必要以上に気を遣い、友人関係に不安を感じ、不満足感を覚えている。

次いで親との関係意識では、理想的自己志向の強い群ほど親との信頼関係が築けており、相互理解もはかられているので、親からの小言をあまり疎んじていない。

さらに、教師との関係意識では、理想的自己志向の強い群ほど教師の指導や授業時の注意を真摯に受け止めている。また、自分のことをもっと理解して欲しいとも感じている。しかし、教師との信頼関係や教師理解に関しては、評定平均値が 2.5 を下回っており、十分な相互理解がなされているとは言い難い。一方、理想的自己志向の弱い群はいずれの項目も評定平均値が 2.5 を下回っており、教師との相互理解はなされておらず、教師の指導や授業時の注意にあまり意をはらっていない。

そして、理想的友人関係では、理想的自己志向の弱い群ほど相手の気持ちに深入りすることなく、自分の気持ちや感情を抑え、口論や喧嘩を回避することが大切であると考えている。

このように、理想的自己志向が強いが弱いかによって他者関係意識の在り方が異なっている。すなわち、理想的自己志向が弱い者ほど、親や教師との相互理解が十分なされておらず、希薄で平板な関係を友人関係の理想としている。その一方で、理想的自己志向が強い者は、やや他者関係に疲労しているものの、親との相互理解は十分なされている。また、教師の指導や注意を真摯に受け止め、深く、時には対立も辞さない友人関係を理想としている。

第6項 自己評価のタイプ別による他者関係意識

表3-3-9;自己評価のタイプ別他者関係意識の有意差検定結果

質問項目	A群	B群	C群	D群	平均	検定
<b>〔他者関係疲労〕</b>						
クラスにいとストレスを感じることがありますか。	2.26	2.42	2.56	2.71	2.34	**
クラスには自分の居場所がないと感じることがありますか。	1.76	1.68	2.32	2.29	1.98	**
友達との関係に何か満たされないものを感じますか。	2.39	1.92	2.77	2.26	2.44	**
私は友達から嫌われるのではないかと不安を感じる。	2.51	1.96	3.14	2.68	2.64	**
クラスの中には、関わらなくてすむなら関わりたくないひとがいますか。	2.30	2.49	2.49	2.68	2.41	*
クラスの中には、利己的な(自分勝手な)振る舞いをするひとがいますか。	2.66	2.58	2.58	2.77	2.59	
私は友達や先輩などにかなり気がつかっている。	2.28	1.91	2.60	2.32	2.40	**
クラスのあまり親しくないひとに気がつかれますか。	2.77	2.24	3.00	2.74	2.75	**
<b>〔親との相互理解〕</b>						
あなたは、親はあなたのことを理解していると思いますか。	2.90	2.26	2.52	2.03	2.64	**
あなたは、親と信頼関係を築いていると思いますか。	3.05	2.42	2.76	2.45	2.83	**
あなたは、親のことを理解していますか。	2.95	2.35	2.65	2.19	2.73	**
あなたは、親からの生活態度や勉強についての指導や小言をどのように感じていますか。	2.53	2.11	2.30	2.23	2.37	**
あなたは、家のなかで孤立を感じることがありますか。	1.74	1.72	2.16	1.87	1.88	**
<b>〔教師との相互理解〕</b>						
あなたは、先生の生活指導は自分のためになっていると思いますか。	2.61	1.84	2.47	1.97	2.39	**
あなたは、授業中における先生の注意をどのように受け止めていますか。	2.95	2.18	2.85	2.48	2.73	**
あなたは、先生のことを理解していると思いますか。	2.17	1.55	1.93	1.52	1.96	**
あなたは、先生にもっと自分のことを理解してもらいたいと思いますか。	2.73	1.57	2.45	1.55	2.29	**
あなたは、先生と信頼関係を築いていると思いますか。	2.41	1.54	1.98	1.84	2.09	**
<b>〔理想的友人関係〕</b>						
友達との関係は、相手の気持ちに深入りしないことが望ましい。	2.15	2.45	2.41	2.65	2.4	**
友達とけんかや口論をすることは大切である。	2.86	2.12	2.73	2.32	2.63	**
友達との関係は、自分の気持ちや感情を抑え、相手の話に合わせる大切である。	2.12	2.20	2.21	2.61	2.18	
<b>〔残余項目〕</b>						
一人で過ごす時間より友達と過ごす時間が大切である。	3.24	2.61	3.10	2.68	3.02	**
友達との関係では、相手があるがままに認めることが大切である。	2.46	2.22	2.56	2.39	2.47	

\*\* : P < .01 \* : P < .05

A群 : 現実自己像肯定群 \* 理想的自己志向強い群

B群 : 現実自己像肯定群 \* 理想的自己志向弱い群

C群 : 現実自己像否定群 \* 理想的自己志向強い群

D群 : 現実自己像否定群 \* 理想的自己志向弱い群

表 3-3-9 は、現実自己像と理想的自己志向をクロスし、得られた群をそれぞれ現実の自己像を肯定し理想的な自己への志向も強い群（A群）、現実の自己像を肯定しているが理想的な自己志向が弱い群（B群）、現実の自己像を否定的に捉えているが理想的な自己への志向が強い群（C群）、現実の自己像を否定的に捉えており理想的な自己への志向も弱い群（D群）とし、第3項で得た他者関係意識に関する因子ごとに、それぞれの評定平均値および4群の分散分析結果を示した。なお、A群は148人（7.13%）、B群は74人（3.56%）、C群は207人（9.97%）、D群は31人（1.49%）であった。

4群の分散分析の結果、他者関係疲労では7項目中6項目で有意差が見られた。同様に、親との相互理解および教師との相互理解では全項目で有意差が見られた。そして、理想的友人関係では3項目中2項目に有意差が見られた。

#### 1．現実の自己像を肯定し理想的な自己への志向も強い群の他者関係意識

まず、他者関係疲労では、分散分析の結果、有意差があった項目のうち、平均値2.5（小数点第2位以下切り捨て、以下省略）を超えているものは「クラスのあまり親しくない人に気を遣うか」（2.77）のみである。したがって、他者との関係にさほど疲労していないと推察される。

次いで親との相互理解では、いずれの項目も平均値よりも高くなっている（逆転項目では平均値よりも低くなっている、以下省略）。したがって、親との相互理解はなされているものと推察される。

さらに、教師の生活指導は自分のためになっていると考えており、また、授業時における教師の注意も意識している。その上、教師に自分のことをもっと理解してほしいとも考えている。

そして、理想的友人関係では、喧嘩や口論をすることは大切であり、時には相手の気持ちに深入りし、自分の気持ちや感情を露わにすることが必用であると考えている。

このように、現実の自己像を肯定し理想的な自己への志向も強い者は、他者との関係にさほど疲れるということはない。また、親や教師との相互理解もなされている。さらに、友人関係では、感情を露わにした激しい衝突や深層的な部分での交流を理想的な関係としている。

#### 2．現実の自己像を肯定しているが理想的な自己志向が弱い群の他者関係意識

他者関係疲労では、分散分析の結果、有意差があった項目のうち、平均値を超えているものはない。したがって、他者関係に疲労していないものと推察される。

次いで親との相互理解では平均値を超えているものはない。したがって、親との相互理解が十分なされているとは言い難い。

さらに、教師との相互理解でも平均値を超えているものはなく、教師との信頼関係は構

築されていないと考えている。また、教師に自分を理解してほしいとは考えておらず、教師の生活指導が自分にとって有意なものであるとも認識していない。

そして、理想的友人関係では、自分の気持ちや感情を露わにすることは大切であると考え、一方で、喧嘩や口論は回避する傾向にある。

このように、現実の自己像は肯定しているが理想的な自己への志向が弱い者は、他者との関係に疲れるということはないが、親や教師との相互理解が十分なされているとは言い難い。また、理想的な友人関係では、喧嘩や口論をしない程度に自分の気持ちや感情を露わにすることが大切であると考えている。

### 3. 現実の自己像を否定的に捉えているが理想的な自己への志向が強い群の他者関係意識

まず、他者関係では、友人との関係に満たされないものを感じており、友人から嫌われるのではないかという不安を感じている。また、周囲の者に気を遣っており、とりわけクラスのあまり親しくない者に対しては一層気を遣っている。

次いで親との相互理解においては、顕著なものは見受けられないが、生活態度や勉強に関する親の小言についてはややうっとうしく感じている。

さらに、教師との信頼関係は構築されていないと考えている一方で、授業時における教師からの注意は意識している。

そして、理想的友人関係では、喧嘩や口論をすることは大切であり、自分の気持ちや感情を露わにすることも必要であると考えている。

このように、現実の自己像を否定的に捉えているが理想的な自己への志向が強い者は、友人から嫌われるのではないかという不安を感じ、周囲の者にも気を遣っていることにより、他者関係では疲労しているものと推察される。親との相互理解はなされているものの、教師との信頼関係は十分構築されていない。理想的な友人関係は、感情を露わにした激しい衝突も必要であると認識している。

### 4. 現実の自己像を否定的に捉えており理想的な自己への志向も弱い群の他者関係意識

まず、他者関係では、友人から嫌われるのではないかという不安を感じる傾向にある。また、クラスではあまり親しくない者に気を遣い、クラスにストレスを感じ、クラスの中には関係を回避したい対象も少なからずいると考えている。

次いで親との相互理解では、各項目とも平均値を超えていない。したがって、親との相互理解が十分なされているとは言い難い。

さらに、教師との相互理解でも各項目とも平均値を超えていない。具体的には、教師との信頼関係は構築されていないと考えている。また、教師に自分を理解してほしいとも考えていない。さらには、教師の生活指導が自分にとって有意なものであるとも認識していない。

そして、理想的友人関係では、喧嘩や口論をすることを避け、相手の気持ちに深入りせず、むしろ自分の気持ちや感情を抑え、相手に話を合わせる事が大切であると考えている。

このように、現実の自己像を否定的に捉えており理想的な自己への志向も弱い者は、絶えず友人関係に不安を持ち、クラスはストレスを増長させる場所との認識があり、他者関係に疲労していると推察される。また、親や教師との相互理解は十分はかられているとは言い難く、とりわけ教師に対しては基本的信頼感を持っていないものと推察される。さらに、友人関係では、平板で希薄な関係を理想としている。

このように、他者関係における疲労の要因は、現実の自己像の認識の差異にあると考えられる。すなわち、現実の自己像を肯定的に認識している者は、他者関係に疲労することはない。一方、現実の自己像を否定的に認識している者は、他者関係に疲労を感じている。また、理想的自己への志向の差異が、親や教師との相互理解や理想的友人関係の在り方の決定要因になっていると考えられる。すなわち、親や教師との相互理解がなされており、友人関係もより強固な関係を希求している者は、理想的自己への志向が強い。逆に、親や教師との相互理解は十分に促進されておらず、友人関係も平板で希薄な関係を求めている者は、理想的自己への志向が弱い。

#### 第4節 調査のまとめ

##### 1. 高校生のコミュニケーションの実際

高校生が他者とのコミュニケーションに用いる手段としては、家庭用電話、手紙、ポケットベル、PHS・携帯電話が主要なものとして利用されている。今後は、都市部の高校生のように、その役割や性格からPHS・携帯電話がコミュニケーションツールの主になるものと考えられる。

高校生のコミュニケーションベースについては、親、教師、クラスメイトといった周囲との会話の機会を半数前後の者が持ち得ていない。また、2割を超える者が家庭で孤食となっており、「家庭の食事」の意義が見失われつつある。

クラスの中に自己開示ができる存在を見いだしていない者が3割近くおり、クラス内でのコミュニケーションがなされているとは言い難い。

##### 2. 高校生の他者関係意識と自己評価

高校生の他者関係意識については、他者関係疲労、親との相互理解、教師との相互理解、理想的友人関係の4因子が抽出された。

また、高校生の自己評価については、現実自己像、理想的自己志向の2因子が抽出された。

ここに、高校生の他者関係意識と自己評価を総括すると次のようになる。すなわち、高校生の少なからず者は、他者関係に疲労している。具体的には、まず友人との関係に気を遣い、関係の維持に不安を抱え、関係そのものに不満足感を覚えている。また、クラスメイトとは積極的な関係を持つとせず、むしろ気を遣う存在、ストレスを感じさせる存在と認識している。さらに、親や教師との相互理解は十分ではなく、特に教師とは大半の者が信頼関係が構築されていないと感じており、教師への期待や教師からの指導をさほど意識していない。そして、相互の気持ちに深入りしない平板で希薄な友人関係を理想と見なしている。

このような他者関係意識を持つ高校生の多くは、自己の良さや能力を見いだしていない。高校生のうち二人に一人は、現実の自己を否定的に認識している。しかも、現実自己像の認識の差異が、他者関係意識の在り方に繋がっている。すなわち、現実自己像を否定している者ほど、他者関係に疲れ、希薄で平板な関係を友人関係の理想としている。一方、現実自己像を肯定している者は、他者関係に疲労することなく、親との相互理解も十分はかられており、深く、時には対立も辞さない友人関係を理想としている。

また、7割前後の高校生は、理想とする自己の在り方を志向している。同様に、理想的自己志向の強弱の差が他者関係意識の在り方に繋がっている。すなわち、理想的自己志向が弱い者ほど、親や教師との相互理解が十分でなく、希薄で平板な関係を理想的な友人関係としている。一方、理想的自己志向が強い者は、やや他者関係に疲労しているものの、親との相互理解は十分なされている。また、教師の指導や注意を真摯に受け止め、深く、対立を怖れない友人関係を理想としている。

したがって、自己評価の差異が他者関係意識の在り方に繋がっていると言えよう。

### 3. 高校生の自己評価のタイプ別による他者関係意識

高校生の自己評価のタイプを、現実の自己像を肯定し理想的な自己への志向も強い者、現実の自己像は肯定しているが理想的な自己への志向が弱い者、現実の自己像を否定的に捉えているが理想的な自己への志向が強い者、そして現実の自己像を否定的に捉えており理想的な自己への志向も弱い者と分類し、それぞれの他者関係意識を明らかにした。

まず、現実の自己像を肯定し理想的な自己への志向も強い者は、他者関係における疲労はあまり見受けられない。親や教師との相互理解もはかられており、友人関係においては、感情を露わにした激しい衝突や深層的な部分での交流を理想的な関係としている。

次いで、現実の自己像は肯定しているが理想的な自己への志向が弱い者は、他者関係に疲労はしていないが、親や教師との相互理解が十分できているとは言い難い。その上、理想的な友人関係は、喧嘩や口論をしない程度に自分の気持ちや感情を露わにすることが大

切であると考えている。

さらに、現実の自己像を否定的に捉えているが理想的な自己への志向が強い者は、他者関係に疲労していると推察される。親との相互理解はなされているものの、教師とはその信頼関係が十分構築されていない。理想的な友人関係は、感情を露わにした激しい衝突も必要であると認識している。

そして、現実の自己像を否定的に捉えており理想的な自己への志向も弱い者は、絶えず友人関係に不安を持ち、クラスはストレスを感じる場所と位置づけ、他者関係に疲労している。また、親や教師との相互理解も十分なされていない。とりわけ教師に対しては基本的信頼感を持っていない。さらに、友人関係は、平板で希薄な関係を理想としている。

以上より、現実の自己を否定的に評価している者、自己の理想的な在り方に対する志向が弱い者が、他者関係に疲労し、親や教師との相互理解もなされておらず、そして友人関係も平板で希薄な関係を希求している。したがって、高校生の自己評価を高め、理想的な自己の在り方を志向できるような教育課程を編成したり、指導(pupil guidance もしくは pupil personnel work)を行うことが高等学校に求められる一つの役割であると考えられる。

#### 【註および引用文献】

- (1)高知県人材情報研究所『就職ガイドブック高知の企業』、1997年。
- (2)高知県教育委員会「教育世論調査」、1993年。調査は、20歳以上の高知県民1000人を対象に行われた。
- (3)『S A P I O』1998年10月28日号、26頁～27頁。
- (4)同上。
- (5)『朝日新聞』社説、平成10年10月23日。

## おわりに

本研究（中間報告）は、学校の現実を教師の視点でまとめたものである。このような生徒の現実に対し、教師として、学校として何をなすべきか考えねばならない。教師にできることは、授業であり指導である。また、学校の在り方は、教育課程の編成に集約できる。

したがって、継続研究として、教師の授業、指導および教育課程の編成に焦点を当てた研究を行いたい。

最後になりましたが、本研究を進めるに当たり、格別のご指導とご協力、ご助言を賜りました皆様方に対し、心より感謝申し上げます。

特に校務ご多忙の中、本研究に対し深いご理解をいただき、調査に快く協力して下さいました協力高等学校長並びに公民科担当の諸先生方に厚く御礼を申し上げます。

また、マークカード使用に当たり、使用を快諾して下さいました寺尾康、藤田勇人、門脇優至の各先生方に深く感謝の意を表します。

高知県高等学校教育研究会公民科倫理部会  
高校生の「在り方生き方」を考える会

鈴江 功武（高知県立嶺北高等学校）  
寺尾 隆二（高知県立高知丸の内高等学校）  
谷脇 澄男（高知県立須崎高等学校）  
吉岡 佳代（高知県立須崎工業高等学校）  
福井 恵子（高知県立高知西高等学校）  
市原 庸寛（高知県立須崎高等学校）